

国立国語研究所学術情報リポジトリ

群馬県藤岡市方言における「養蚕語彙」の比喻表現

著者	新井 小枝子
雑誌名	日本語科学
巻	21
ページ	43-64
発行年	2007-04-25
URL	http://doi.org/10.15084/00002172

群馬県藤岡市方言における「養蚕語彙」の比喩表現

新井 小枝子

(群馬県立女子大学)

キーワード

養蚕語彙, 比喩, 比喩性, 群馬県藤岡市方言

要 旨

群馬県藤岡市方言における、養蚕語彙を用いた比喩を取り上げ、それらの表現によって、人びとが日常生活のどのような部分を、どのように理解し、表現しているのかについて論じたものである。具体的には、養蚕世界において〈蚕〉および〈桑〉を対象として用いられている語彙が、日常世界の〈人〉〈人の生き方〉〈子どもの育て方〉や、〈農作物〉〈仕事〉〈時期〉〈樹木〉を対象にして、語彙としてのまとまりをもって比喩に用いられていることを明らかにした。さらに、養蚕語彙の本来の意味から、比喩の意味への変化の仕方を考察し、その比喩のメカニズムには、比喩性の強い型と弱い型があるとした。養蚕が盛んであった地域では、それが行われなくなった今でも、日常生活において養蚕語彙を用い、熟知した生活世界のものの見方で日常世界を捉え、効率良く、かつ、豊かな表現を展開しているとし、それが、当地域における比喩の特徴であると結論づけた。

1. 研究の目的と方法

群馬県における特徴的な方言事象に、養蚕語彙による比喩がある。これは、かつて群馬県が、養蚕の盛んな地域であったことによるものである。養蚕語彙は、人びとが「養蚕を営む生活世界（以下、養蚕世界）」で用いる生業語彙である。日本全国で養蚕業が衰退しつつある現在では、養蚕語彙の専門的な使用はほとんどないものの、群馬県のような地域では、養蚕世界を離れた「日常の生活世界（以下、日常世界）」において、比喩として使用される場面が頻繁に観察される。

本稿の目的は、養蚕語彙という特定の生業語彙を用いた比喩が、方言社会においてどのように生成され、どのように機能しているのかを明らかにすることにある。人びとが養蚕世界とは別の生活世界で養蚕語彙を用いるとき、その生活世界を養蚕語彙を通してどのように理解し、表現しているのかを考えてみたい。方法は次の通りである。

- (1) 比喩に用いられた養蚕語彙の本来の意味を記述し、比喩によって表現される日常世界の対象との対応関係を明らかにする。
- (2) 養蚕語彙が本来表している対象と、日常世界の対象との対応関係をもとに、語ごとに比喩の方法を図式化し、比喩のメカニズムを明らかにする。
- (3) 養蚕語彙による比喩の類型化を行う。
- (4) 養蚕語彙による比喩が生ずる要因を考察する。

2. 資料について

本稿で取り上げる比喩は、群馬県方言の中でも、藤岡市方言における日常的な会話の中から採録したものである。藤岡市は、調査者（新井小枝子）の言語形成地であり、かつ、現在の生活地であるため、常に自然傍受調査が可能な地域である。比喩による表現は、言語表現におかしみや愉しみを与えつつ、日常会話の中で生き活きとはたらくものである。このような比喩の性質に鑑み、日常的な自然傍受調査によって自然談話の採録を行い、必要の生じた際には話者に内省を求め、質問調査を行う方法をとっている。

話者は、藤岡市の生え抜き8名である。各々の生年は、大正5年～昭和35年の間に位置する。当地で、昭和30年代～50年代に養蚕に関わっていた方々である。話者の生年に開きがあるが、養蚕語彙による比喩については、同時代に、同地域において養蚕世界に関わっていたということが重要であると考え、年齢の差は問題なしとした。

3. 比喩に使用される養蚕語彙

藤岡市方言で、比喩に用いられる養蚕語彙は14語ある。その内訳は、もともと養蚕語彙である13語と、比喩の成立に伴い日常世界で新しく造語された1語である。

養蚕語彙13語は、〈蚕〉¹を対象とした語彙と、〈桑〉を対象とした語彙に分類できる。養蚕語彙には、それらの語彙の他に、〈蚕の活動〉〈虫害〉〈廃物〉〈人〉〈場所〉〈信仰〉〈作業〉〈道具〉を表す多くの語彙がある²が、これらによる比喩は見られない。比喩に用いられる養蚕語彙は、〈蚕〉と〈桑〉を対象としたものに偏っている。

一方、新造語はフユゴ（冬蚕）である。〈蚕〉を表すハルゴ（春蚕）、ナツゴ（夏蚕）、アキゴ（秋蚕）からの類推で生じたものであろう。このことから、〈蚕〉を対象とした語彙に分類して考察する。

以下、それぞれの語が本来表している養蚕世界の対象ごとに、比喩に用いられる養蚕語彙の性質を記述する。養蚕語彙としての意味を記述し、本来表している対象と、比喩が表す対象の対応関係を明らかにする。

3.1. 〈蚕〉を対象とした語彙

養蚕世界において〈蚕〉を対象としている語彙は、もっとも比喩に用いられやすい。比喩に用いられる14語のうち13語は、〈蚕〉を対象としている語彙である。それらは、さらに、〈蚕〉を表すものと、〈蚕の飼い方〉を表すものに分類できる。なお、〈繭〉を表す語も〈蚕〉を表すものに含めて考察する。〈繭〉は、〈蚕〉が成長をとげて、その最終段階に作り上げたものであり、〈蚕〉が姿を変えたものととらえられるからである。〈蚕〉を表す語彙と〈蚕の飼い方〉を表す語彙は、それぞれの語の意味に注目すると、次のように下位分類することができる。

- 〈蚕〉を表す語彙——
- 1 一年間の飼育期を表す語彙（図1）
 - 2 一飼育期中の成長過程を表す語彙（図2）
 - 3 一飼育期中の病的な症状を表す語彙（図3）
- 〈蚕の飼い方〉を表す語彙——
- 4 一飼育期中の飼い方を表す語彙（図4）

まず、図1に示したように、〈蚕〉を表す語彙のうち、一年間の飼育期によって〈蚕〉を表す語彙は、ハルゴ（春蚕）、ナツゴ（夏蚕）、アキゴ（秋蚕）およびフユゴ（冬蚕）という和語と、バンシュウ（晩秋蚕）という漢語である。日常世界では、〈人〉〈時期〉を対象にして用いられる。具体的には、ハルゴ、ナツゴ、アキゴ、フユゴが、誕生季節別に〈人〉を表し、バンシュウが〈時期〉を表している。前者の〈人〉を表す語彙は、〈蚕〉を表す造語成分-コをもつ複合語である。その造語成分と、飼育期を表すハル-、ナツ-、アキ-、フユ-を合成した語である。このとき、飼育期を表す造語成分には、季節を表す語が用いられているが、図1からわかるように、季節の期間がずれている。養蚕語彙において、これらの語は、飼育の季節を表しながらも、一年間の飼育期の順番を表す役割が大きくなっている。

養蚕世界の対象	〈蚕〉飼育期別				
語形	ハルゴ (春蚕)	ナツゴ (夏蚕)	アキゴ (秋蚕)	バンシュウ (晩秋蚕)	フユゴ (冬蚕)
本来の意味	「一年の初め [5月10日頃から一ヶ月間] に飼育する蚕」	「春蚕の次 [6月25日頃から一ヶ月間] に飼育する蚕」	「夏蚕の次 [7月20日頃から一ヶ月間] に飼育する蚕」	「秋蚕の次 [9月1日頃から一ヶ月間] に飼育する蚕」	×
比喩の意味	「春 [3~5月] 生まれの人」	「夏 [6~8月] 生まれの人」	「秋 [9~11月] 生まれの人」	「生姜を収穫する時期」 「植木屋が来る時期」 「葱が美味になる時期」	「冬 [12~2月] 生まれの人」
日常世界の対象	〈人〉誕生季節別			〈時期〉	〈人〉誕生季節別

図1 〈蚕〉を表す語彙——1 一年間の飼育期を表す語彙

養蚕世界の対象	〈蚕〉成長過程			
語形	オキッコ (起き蚕)	オグワ (大桑)	ズー (熟蚕)	マユ (繭)
本来の意味	「休眠から覚めて脱皮したばかりの蚕」	「成長期の蚕」	「繭を作る直前の蚕」	「繭」 = 蚕が糸を吐いて作った丸形の糸の塊
比喩の意味	「あちこちよそ見をして落ち着きのない小学生たち」	「成長期の子ども」	「立つ直前の赤ん坊」 「年を取った人」 「過熟の苺」 「過熟のトマト」 ズーニ ナル 「たまりに たまった仕事」	マユオ ツクル 「人生を全うする」
日常世界の対象	〈人〉成長過程		〈農作物〉状態	〈仕事〉状況
			〈人〉成長過程	

図2 〈蚕〉を表す語彙——2 一飼育期中の成長過程を表す語彙

一方、後者の-コを持たないバンシューも〈蚕〉を表しており、養蚕世界に専用の語である。バンシューについて、普段どのように用いている語であるかを話者に説明を求めると、次のように説明する。

①バンシューワ イツゴロツタッテ アキゴノ ツギノ オカイコノ コトツキリ オモ
イウカバネーヨ。イツッテ イワレリヤー クガツダンベネー。
(晩秋はいつ頃と言ったって、秋蚕の次の御蚕のことしか思い浮かばないよ。何時と言わ
れれば九月だろうね)

すなわち、養蚕を営む人びとにとってのバンシューは〈蚕〉のことを表す語である。使用語としてのバンシューは、もっぱら「秋蚕の次に飼育する〈蚕〉」を表しており、〈時期〉を表すとすれば「9月」ということになる。共通語としては、バンシューは「11月ごろの季節」を表すと内省するものの、日常的な会話においてこの意味で使用されることはほとんどない。人びとにとってのバンシューは、〈蚕〉を表すためのバンシューサン（晩秋蚕）であり、そして、その次の段階として、〈蚕〉と隣接関係にある〈飼育期〉を表すようになったと考える。このように考えると、藤岡市方言におけるバンシューは、養蚕世界で造語され、かつ、意味が拡張した語であり、養蚕世界に専用の語であると認めざるをえない。なお、バンシューは漢語であり、ハルゴ、ナツゴ、アキゴという和語で語彙体系が展開している中であっては異質である。この漢語が用いられる背景には、まず養蚕世界の変化として、一年間の飼育回数が複数になるという発達があり、つぎにその変化に対応して漢語を当てたということが考えられよう。一年の飼育回数が複数になったことにより、その一回一回を表すためには四季を表す4つの和語だけでは足りなくなり、漢語をあてて表現したということになる。

つぎに、図2に記した一飼育期中の成長過程によって〈蚕〉を表す語彙は、日常世界の〈人〉〈農作物〉〈仕事〉に用いられる。成長過程の若い段階から順番に、オキッコ（起き蚕）、オーグワ（大桑）、ズー（熟蚕）、マユ（繭）である。オキッコ、オーグワ、ズー、マユが〈人〉に、さらにズーは〈農作物〉と〈仕事〉に用いられる。オキッコは、〈蚕〉を表す造語成分-コと、〈蚕〉の活動を表すオキ-が結合して、「休眠から覚めて脱皮したばかりの蚕」を表す語である。オーグワは、字義通りには「大量の桑」であるが、意味の隣接関係に基づいて大量の桑を必要としている「成長期の蚕」を表す。また、ズーとマユは単純語であり、養蚕語彙の中でも最も専門性が高い。ズーは、「繭を作る直前の蚕」を表し、マユは「繭」であり、成長の最終段階に「蚕が糸を吐いて作った丸形の糸の塊」を表す。

養蚕世界の対象	〈蚕〉状態	
語形	オクレッコ（遅れ蚕）	タレコ（垂れ蚕）
本来の意味	「成長の遅い蚕」	「病気で体が膿んだ蚕」
比喻の意味	「成長の遅い子ども」	「年をとって不自由な人」
日常世界の対象	〈人〉状態	

図3 〈蚕〉を表す語彙——3一飼育期中の病的な症状を表す語彙

さらに、図3に記した一

養蚕世界の対象	〈蚕の飼い方〉	
語形	アツガイ（厚飼い）	ウスガイ（薄飼い）
本来の意味	「頭数密度を高くして蚕を飼う飼い方」	「頭数密度を低くして蚕を飼う飼い方」
比喩の意味	「一時に大人数の子の面倒をみる育て方」	「一時に小人数の子の面倒をみる育て方」
日常世界の対象	〈子どもの育て方〉	

図4 〈蚕の飼い方〉を表す語彙——4—飼育期中の飼い方を表す語彙

飼育期中にみられる病的な症状によって〈蚕〉を表す語彙は、オクレッコ（遅れ蚕）、タレコ（垂れ蚕）であり、日常世界の〈人〉を対象として用いられる。〈蚕〉を表す造語成分-コと、状態を表すオクレ-（遅れ）、タレ-（垂れ）が結合してできた語である。それぞれ、成長が遅い、体が膿んで垂れるというマイナス評価、すなわち病的な症状を表した語彙である。

以上図1～3までの〈蚕〉を表す語彙の他に、図4に記した一飼育期中の飼い方を表すアツガイ（厚飼い）とウスガイ（薄飼い）がある。図4のように、〈蚕の飼い方〉を表す語彙は、日常世界では〈子どもの育て方〉を表す。サンザ（蚕座：蚕の生活するベッド）の状態で、〈飼い方〉を言い表している。〈蚕〉のトースー（頭数）密度に注目した造語である。ある場所に対する頭数密度が高ければアツイ（厚い）、低ければウスイ（薄い）である。

3.2. 〈桑〉を対象とした語彙

〈桑〉を対象とした語彙から比喩に用いられるものは、図5に示したようにタテドーシ（立て通し）の一語である。タテドーシは、一年間の〈桑〉の成長過程のある一段階を表す語である。〈桑〉の造語成分を持たないが、藤岡市方言では〈桑〉を表す養蚕世界に専門の語である。養蚕世界では、「伐採せず伸び過ぎている桑」を表す。日常世界の比喩では〈人〉や〈樹木〉に対し用いられている。

養蚕世界の対象	〈桑〉成長過程	
語形	タテドーシ（立て通し）	
本来の意味	「伐採せず伸び過ぎている桑」	
比喩の意味	「結婚せず年をとり過ぎている女性」	
	「伐採せず伸び過ぎている梅の木」	
日常世界の対象	〈人〉成長過程	〈樹木〉成長過程

図5 〈桑〉を表す語彙

4. 比喩のメカニズム

さて、養蚕語彙として本来表している対象と、日常世界での対象の対応が明らかになったところで、その対応関係にしたがって、比喩の方法を図式化し、比喩のメカニズムについて考察を行う。これによって、人びとが養蚕世界を通して、どのように日常世界を理解しているのかを明ら

かにし、さらには比喩の類型化を行う。

4.1. 〈人〉を表す比喩

4.1.1. 飼育期別の〈蚕〉を表す語彙からの比喩

ここで考察する比喩は、ハルゴ、ナツゴ、アキゴが、誕生季節別に〈人〉を分類して用いられるというものである。ハルゴ、ナツゴ、アキゴは、養蚕世界でも均整のとれた語彙体系をなしており、日常世界でもそれを保ちながら比喩に用いられる。さらに、養蚕語彙の体系としてはあきまとなっている部分に、フユゴを造語して組み込んでいる。これらの四語が用いられる比喩の事例は②③の通りである。

- ② A：アンター イツ ウマレタン。(あなたはいつ生まれたの)
B：アシワ ナツゴダヨ。(私は夏生まれだよ)
A：アンタワ ハルゴカイ、アキゴカイ。(あなたは春生まれか、秋生まれか)
C：アタシワ アキゴ。(私は秋生まれ)
- ③ オバーチャンナ ハチガツウマレダカラ ナツゴダケド ○○ワ イチガツダカラ フユゴダー。
(お婆ちゃんは八月生まれだから夏生まれだけど、○○は一月だから冬生まれだ)

この会話によって、〈蚕〉を表す語彙で、誕生季節別に〈人〉を表している様子が具体的にわかる。〈蚕〉は、一年のうちのある時期、約1ヶ月間の飼育期をとって飼育される。その飼育期が、〈人〉の誕生季節に対応し、それに伴って、養蚕語彙には欠けているフユゴを新しく造語して、日常世界において「ハルゴ（春子）、ナツゴ（夏子）、アキゴ（秋子）、フユゴ（冬子）」という均整のとれた体系を作り上げている。

この比喩を図式化したものが、図6である³。養蚕世界でのハルゴ、ナツゴ、アキゴの体系は、日常世界の四季を表すハル（春）、ナツ（夏）、アキ（秋）、フユ（冬）の語彙体系に支えられていると考える。四季の語彙体系を背景に、養蚕世界の飼育期別の〈蚕〉が表され、そして、それが再び、日常世界の〈人〉に用いられ、比喩が成立している。このとき、先にも述べたように、

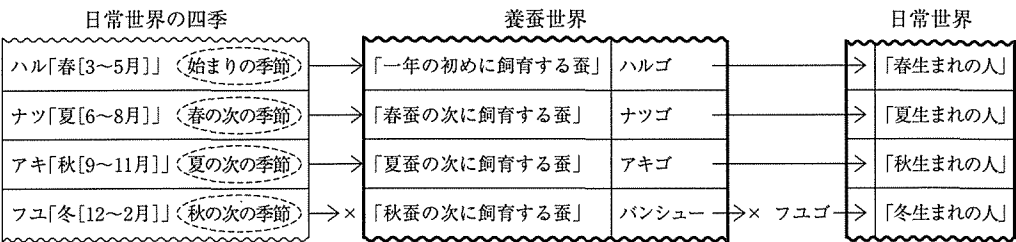


図6 事例②「ナツゴ・ハルゴ・アキゴ」・事例③「フユゴ」の比喩

〈蚕〉を表すハルゴ、ナツゴ、アキゴが指し示す絶対的な期間と、〈人〉を表す場合の期間のずれは捨象されている。これらの語彙が、もともと日常世界の四季を表す語彙体系に支配されているためであろう。

4.1.2. 成長過程別および病的な症状別の〈蚕〉を表す語彙からの比喻

成長過程別の〈蚕〉を表す語で〈人〉を表すものは、オキッコ、オーグワ、ズーである。同様に、病的な症状別の〈蚕〉を表す語では、オクレッコ、タレコである。

まず、オキッコ、オーグワ、ズーは、それぞれ次のように用いられる。

- ④ 場面 小学校の運動会で、校長先生の挨拶を聞いている小学生の様子を見て。

A：マッタク ショーガクセーツツーンワ コーチャーセンセーガ ハナシー シテタツテ モゾモゾ モゾモゾシテテ オキッコノヨード。

(全く、小学生というのは、校長先生があいさつをしているというのに、もそもそもそもぞ動いていて休眠から覚めて脱皮したばかりの蚕のようだ)

- ⑤ 場面 話者Aが自分の家の米の消費について話題を提供して。

A：ウチワ サイキン コメガ ナクナルンガ ハエーンダイネー。スグナクナツチャウ。マータ コメツキー イガナクツチャ。

(私の家では最近米が無くなるのが早いのだよね。すぐになくなってしまう。また米搗きに行かなくてはならない)

B：ナンダ オメーンチワ オーグワカ。

(なんだお前の家は成長期の子どもがいるのか)

A：ソーダヨ オーグワガ サンニンモ イルモノー。

(そうだよ成長期の子どもが三人もいるもの)

B：ソレジャー オーグワガ サンニンモ イリヤー コメガ ナクナルンモ ハイダーンベ。

(それでは、成長期の子どもが三人もいれば米が無くなるのも早いだろう)

- ⑥ 場面 間もなく一歳の誕生日を迎える孫が、障子に手をかけて立ち上がろうとする姿を見て。

A：アレー、ミテミテー、ハー イマチットデ タツヨ。ズーミタイニ ナツテ キタヨ。

(ああ、[あの姿を] 見て見て、もう もう少しで立つよ。熟蚕みたいに首を高く持ち上げるようになってきたよ)

- ⑦ 場面 ある夏の日の夕方、お互いによく知っている二人(話者A：50歳代と話者B：80歳代女性)が、道ばたで出会って。

A：オバサン マインチ アチーケド ゲンキダノー。

(おばさん毎日暑いけれども元気だね)

B：ハー アシモ ズーナッチマツタカラ ダメサー。セメテ タレコンナンネーヨー
ニト オモッテサ。

(もう私も年をとった人になったからだめさ。せめて年を取って不自由な人にならない
ようにと思ってね)

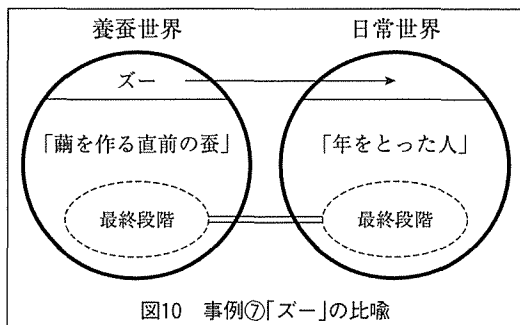
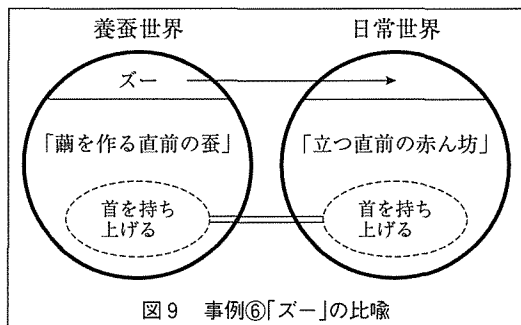
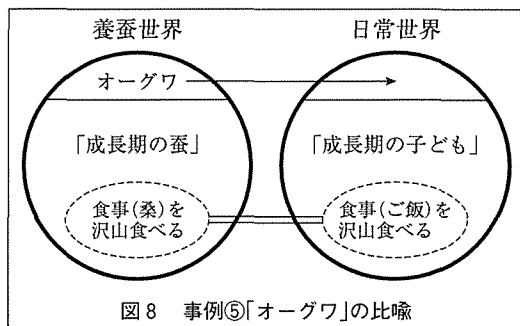
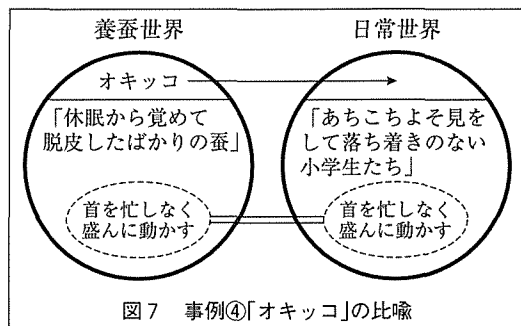
A：ソннаコト ユワネーデ イー マユー ツクッテクンナイ。

(そんなことを言わないで、良い人生を全うしてください)

それぞれの語は、語の意味を構成している意味特徴のある部分を、日常世界の対象に重ね合わせて表現している。

④のオキッコと⑤のオーグワは、〈子ども〉を対象にして用いられている点で共通している。これらの比喩を、図式化したものが図7・図8である。オキッコでは、首を忙しなく盛んに動かすという意味特徴を、〈子ども〉に重ね合わせ、「あちこちよそ見をして落ち着きのない小学生たち」を表す。同様に、オーグワでは食事を沢山食べるという意味特徴で、「成長期の子ども」を表している。オキッコやオーグワで、〈子ども〉のざわついた様子や、大食ぶりを理解し、表現しているのである。

また、⑥⑦も、〈子ども〉とは異なるがズーによって〈人〉を表しているものである。ズーは、図2にも示したように、日常世界では、性質の異なる複数の対象を表している。後にも再び考察の対象となる語であり、比喩での表現力が多様であるといえる⁴。それらの多様な用法の中から、⑥⑦について比喩を図式化したものが図9・図10である。図9では、ズーのもつ首を持ち上げる



げるという意味特徴が、〈赤ん坊〉の状態に重ね合わせられ、「立つ直前の赤ん坊」を表すメカニズムを示している。同様に、図10はズーの幼虫としての最終段階という意味特徴によって、「年をとった人」を表すメカニズムである。

このように、〈人〉に対するズーでは、年齢的に相反する性質をもつ〈赤ん坊〉と〈年寄り〉に用いられている点が特徴的である。これには、まず、比喩が成立するときのメカニズムが関わっていると考える。すなわち、それぞれの比喩が成立するとき、ズーの意味を構成している意味特徴の重ね合わせられる部分が異なるということである。比喩においては、本来語がもっている意味特徴すべてを重ね合わせるのではなく、人びとが注目したある意味特徴にのみ焦点が当たっている。ズーの場合であれば、〈赤ん坊〉に対しては首を持ち上げる、〈年寄り〉に対しては最終段階というそれぞれの意味特徴のみが焦点化され、比喩の成立に関与しているということである。焦点化される意味特徴が異なるものの、それぞれが一つに限定され、〈人〉という同じ範疇の対象に用いられている。

さらに、〈赤ん坊〉に対してはズー ミタイニ ナル（事例⑥）、〈年寄り〉に対してはズー ニ ナル（事例⑦）というように、比喩の表現方法が変わることも指摘しておかなければならない。〈赤ん坊〉に対しては説明語の-ミタイを用いた直喩によっており、〈年寄り〉に対してはそれを用いない隠喩によっている。したがって、比喩によってズー ダと表現された場合には、〈年寄り〉を表しているのであり、〈赤ん坊〉を表すことはできない。目に見える〈ズー〉の外面的な姿形に焦点を当てた比喩には-ミタイを用い、目には見えない〈ズー〉が生物として持っている内面的な性質に焦点を当てた比喩には、そのような説明語を用いない。人びとは、現実の実態をつぶさにとらえて表現し分け、ズーを自由自在に使いこなしているということがわかる。そして、性質の相反する日常世界の対象を、見事に言い当てている。

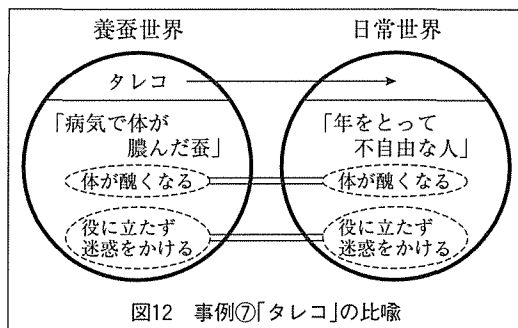
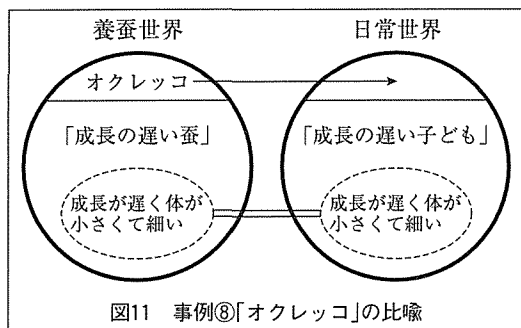
さて、病的な症状を表示することによって〈蚕〉を表しているオクレッコとタレコによる比喩である。タレコの使い方はすでに⑦に記述した通りであるが、オクレッコは⑧の通りである。

- ⑧ ウチノ コワ マーズ ショクガ ホセーカラ ナカナカ デッカクナンネンダヨ、オクレッコサー。

（私の家の子どもは本当に食が細いのでなかなか大きくなりたくないのだよ、成長の遅い子どもさ）

オクレッコ（図11）は、他の蚕と比べて成長が遅く体が小さくて細いという意味特徴を重ね合わせることによって、「成長の遅い子ども」を表す。タレコ（図12）は、体が醜くなる、役に立たず迷惑をかけるという意味特徴によって、「年をとって不自由な人」を表現する。ズーが、単に「年をとった人」を表していたのに対し、タレコは「年をとった人」のマイナスの性質をとらえて表現したものである。

以上のように、成長過程別および病的な症状別の〈蚕〉を表す語彙は、〈人〉の中でも〈子ども〉や〈年寄り〉の、それぞれのマイナス面を表して用いられることがわかる。



4.1.3. 成長過程別の〈桑〉を表す語彙からの比喩

〈桑〉の成長過程の一段階を表すタデオシも、事例⑨のように〈人〉に用いられる。

⑨ A：アンタンチノ ムスメワ イートシニ ナルダンベー。

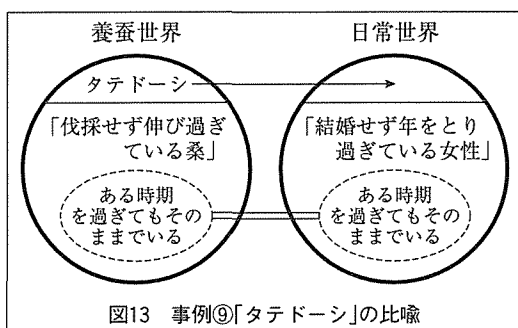
(あなたの家の娘は、いい年になるだろう?)

B：ハー サンジュー スギタンダヨ、シラネーマニ タデオシニ ナッチマッタガネ。

(もう三十歳を過ぎたのだよ、知らないうちに適齢期に結婚せず年をとり過ぎている女性になってしまったんだよ)

A：イマー ソンナコター ネーヨ。

(今の時代はそんなことはないですよ)



タデオシの比喩では、ある時期を過ぎてもそのままではいるという意味特徴を〈人〉に重ね合わせ、「結婚せず年をとり過ぎている女性」を表している(図13)。先には、〈蚕〉によって〈人〉を解釈する例が多く見られたが、〈桑〉によっても〈人〉を解釈し、表現することができる。〈桑〉の性質を、〈人〉に見立てて、その特徴をおかしみを持って表現している例である。この比喩によって、〈人〉

の持っているマイナス面がユニークに表現されることになり、単なる悪態の表現ではなくなっている。

4.2. 〈人の生き方〉を表す比喩

この比喩は、マユ(繭)によるものである。具体的な文例は、先に⑦の事例で示したものである。この表現は、マユオ ツクル(繭を作る)という句で、比喩としての意味を形成している。

〈蚕〉が〈繭〉を作るという行為は、今ある姿での一生を成し遂げるという意味特徴を持っている。それを日常世界の〈人の生き方〉に重ね合わせ、「人生を全うする」という意味を表現している（図14）。〈蚕〉の成長過程と、〈人〉の人生が重ね合わせられた比喻である。〈蚕〉と〈人〉の単なる重ね合わせではなく、自らの生き方までも重ね合わせて表現できるのは、養蚕を営んできた人びとに特徴的なことがらであるといえよう。

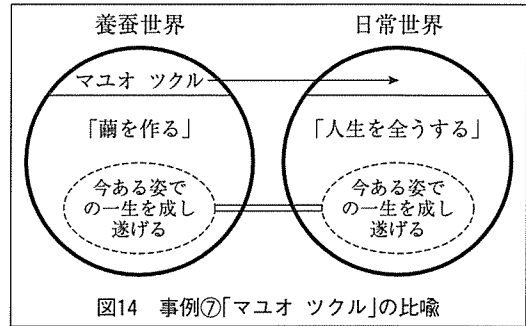


図14 事例⑦「マユオ ツクル」の比喻

4.3. 〈子どもの育て方〉を表す比喻

〈蚕〉を対象とした語彙の中で、〈蚕の飼い方〉を表す語彙であるアツガイとウスガイは、〈子どもの育て方〉を表している。次の⑩のように用いられる。

- ⑩ イマノ コワ ウスガイダカラ シアワセダー。ムカシワ アツガイダツタカラ センセーノ メダッテ イキトドカネーシ オヤダッテ タイシテ メンドーナンカ ミラソネンダカラ。ソレデモ ヨク ソダッタモンダイネー。

（今の子は小人数に対しての子育てだから幸せだ。昔は大人数に対する子育てだったから、先生の目も行き届かないし、親だって大して面倒を見られないのだから。それでも良く育ったものだね）

図15・図16に示したように、養蚕世界におけるアツガイのマイナス面と、ウスガイのプラス面を、それぞれ〈子どもの人数〉と〈蚕の頭数〉に注目して重ね合わせている。アツガイでは、世話が行き届かないという意味特徴を〈子育ての仕方〉に投影することによって、子どもに目が行き届かない、子育てが雑になるということまでも表している。同様に、ウスガイでは、世話が行き届くという意味特徴を〈子育ての仕方〉に投影し、子どもに目が行き届く、子育てが丁寧に

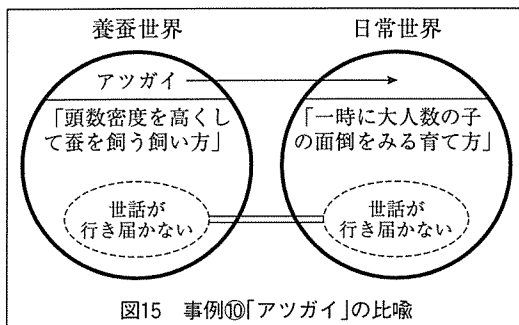


図15 事例⑩「アツガイ」の比喻

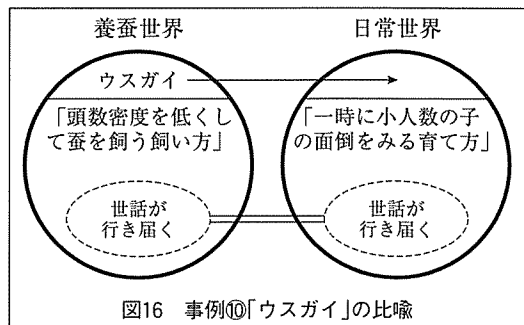


図16 事例⑩「ウスガイ」の比喻

行われるということを表す。先にも、〈蚕〉と〈子ども〉が同等に捉えられている比喩は多く見られたが、蚕の飼育と、子育てにおいても、両者を同価値で捉えていることがわかる。

4.4. 〈農作物〉〈仕事〉を表す比喩

これまでに述べた〈蚕〉を対象とした語彙は、〈人〉を対象とした比喩に用いられたものであったが、一方では、〈人〉以外のものごとを対象にして用いられるものもある。それは、「立つ直前の赤ん坊」「年を取った人」を表すズーが、〈農作物〉や〈仕事〉も表して用いられるというものである。具体的には、〈農作物〉とは「過熟の苺（事例⑪）」「過熟のトマト」であり、〈仕事〉とは「たまりにたまった仕事（事例⑫）」である。

- ⑪ 場面 3月上旬の春の日差しが強まってきたビニールハウスの中で、出荷用苺の採取をしながら。

A：イチゴガ ミンナ ズーンナッチャツカラ イソガシーゾー。マッカンナッチャツテ ミンナシテ クビー フッテルヨーダイ。

（苺がみんな過熟の苺になってしまったから、忙しいぞ。真っ赤になってしまって、みんなして首を振っているようだよ）

B：アー ホントダ ホントダ タイヘンダ。ハヤク モガナケリヤ。

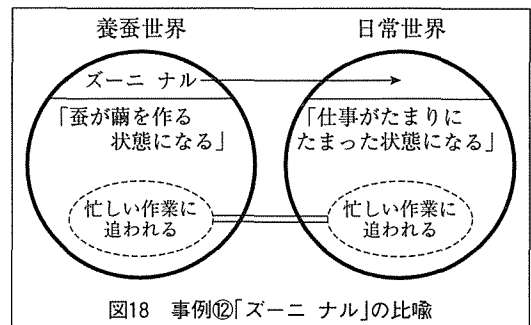
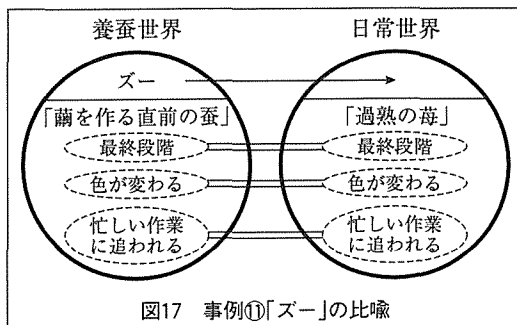
（ああ、本当だ、本当だ、大変だ。早くもがなければ）

- ⑫ 場面 お茶飲み話に花が咲いて、長い時間が経過したことに気付いて。

コンナニ ナガバナシ シテチャー タチマチ ズーンナッチマウ。ハー イーカゲンニシテ イガナケリヤ。

（このように長話をしては仕事がたまりにたまった状態になってしまう。もういい加減にして行かなくては）

まず、⑪の〈農作物〉では、図17に示したように、本来ズーのもっている幼虫の姿をした最終段階、体が透きとおって色が変わる、ジョーゾク（上族：^{マブシ}蚕を族という繭を作らせるための道具の中に入れる作業）の忙しい作業に追われるという意味特徴によって、「過熟の苺」を表している



る。出荷用苺としての最終段階、実が赤くなって色が変わる、収穫の忙しい作業に追われるという部分に重ね合わせられている。一つの意味特徴に限定されることなく、複数の意味特徴がすべて一度に投影され、ズー語によって、養蚕世界の生活実感をすべて抱え込み、別の日常世界を効果的に表現している。この点において、〈人〉、すなわち〈赤ん坊〉(図9)、〈年寄り〉(図10)に用いられるズーとは、比喩表現の成立の仕方が異なっている。

つぎに、⑫の〈仕事〉では、ズーニナルという句によって比喩が成立している。養蚕語彙としてのズーは、「繭を作る状態になった蚕」を意味し、ズーニナル(熟蚕になる)という句の意味は、字義通り「そのような蚕になる」ということを示しているが、比喩では、そのことがらに伴う慌ただしい作業の状況に焦点を当てた表現となっている。図18に示したように、ズーニナルという句がもっている忙しい作業に追われるという意味特徴によって、「仕事が多量にたまった状態になる」ことを表している。これまでに考察してきたズーが語のレベルでの比喩であったのに対し、これは句による比喩である。

4.5. 〈樹木〉を表す比喩

ここで取り上げるのは、〈桑〉を表すタテドーシによって、他の〈樹木〉の状態を表すという例である。先には、〈人〉へのタテドーシについて考察したが、〈樹木〉を表現する場合には、⑬のようになる。

- ⑬ ウメノ キガ タテドーシミテーニ モサモサシテルカラ チット ハギッテヤルベー。
(梅の木が伸び過ぎた桑みたいに生い茂っているから少し剪定してやろう)

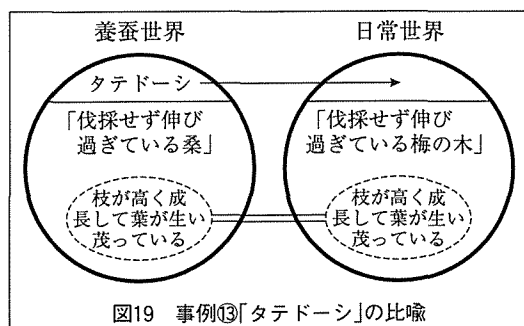


図19 事例⑬「タテドーシ」の比喩

本来タテドーシ(図19)が持っている枝が高く成長して葉が生い茂っているという意味特徴を、〈桑〉以外の〈樹木〉に重ね合わせている。この事例の場合は、適当な時期に「伐採せず伸び過ぎている梅の木」を表しているが、庭木にするような低木全般の、〈樹木〉の生い茂った様子を表現するときに用いるという。

このとき、先に考察した「結婚せず年をとり過ぎている女性」を表す比喩とは表現形式が異なり、-ミテー(みたい)という説明語を伴っている。これは、ズーの考察でみてきた表現形式の違いと同じ現象である。ズーでは、〈赤ん坊〉と〈年寄り〉という相反する対象に用いられたとき、説明語を伴うか伴わないかという違いがあった。タテドーシでも、目に見える外面的な〈桑〉の姿形に焦点を当て、他の〈樹木〉の姿形を表現する場合には、説明語を伴って表現している。目には見えない内面的な〈桑〉の性質に注目して〈人〉の性質を表現する場合には、説明語を用いないで表現している。

4.6. 〈時期〉を表す比喻

ここでは、〈蚕〉を表す語彙から〈時期〉を表すようになったバンシューについて述べる。バンシューは、先に述べたハルゴ、ナツゴ、アキゴと共に、一年間の飼育期別の〈蚕〉を表す語である。ハルゴ、ナツゴ、アキゴが、一連の語彙体系を保ったまま〈人〉を表すのに対し、バンシューは、その体系から抜け出して、異なる対象に用いられる。バンシューは、和語の語彙体系の中に存在する漢語という点でも異質であったが、比喻の成立もこれまでに見てきたメカニズムと異なる。具体的な事例は⑭～⑯である。

- ⑭ A：ショーガワ バンシュードヨネ。ダカラ チット ハヤカンベネー。

(生姜は晩秋蚕の9月ころだね。だから少し早いだろう)

B：ソーダンベネー。(そうだろうね)

- ⑮ ウエキヤノ ○○サンガ キテクレタンワ バンシュードヨ。「カシグネ ハギリマスヨ」 ッテ キテクレタヨ。メガ ホキルンガ ウチバンナルッテ ユッテ。

(植木屋の○○さんが来てくれたのは晩秋蚕の9月ころだよ。「樫の木でできた塀を剪定しますよ」って来てくれたよ。芽が大きくなるのが遅くなると言って)

- ⑯ バンシューンナルト ネギガ アマクッテ ウンマクナルカラ アブライタメニデモスリヤー ウント ウンマイ。

(晩秋蚕の9月ころになると葱が甘くて美味しくなるから油炒めにでもすればとても美味しい)

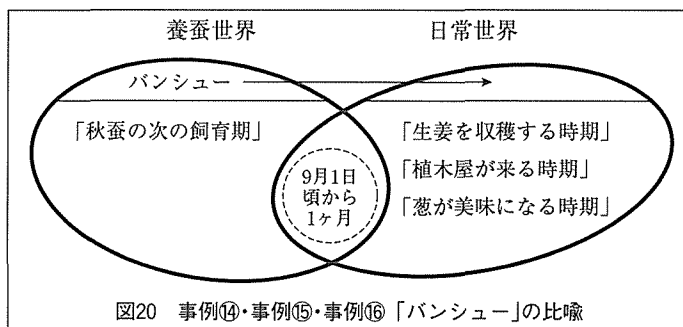


図20 事例⑭・事例⑮・事例⑯「バンシュー」の比喻

バンシューによって、「秋蚕の次の飼育期」、すなわち、9月1日頃から1ヶ月を表している。具体的には、「生姜を収穫する時期」、「植木屋が来る時期」、「葱が美味になる時期」のことを表したものである。養蚕世界の飼育の暦で、日常世界の暦を表しているという事象である。

る。比喻のメカニズムは、図20に示した。「秋蚕の次の飼育期」と、「生姜を収穫する時期」「植木屋が来る時期」「葱が美味になる時期」は、9月1日頃から1ヶ月という点で全く同一の〈時期〉である。バンシューの〈飼育期〉に発生する日常世界の事態として、〈生姜を収穫すること〉〈植木屋が来ること〉という行為や、〈葱が美味になること〉という事柄があり、そのそれぞれの事態をバンシューの〈時期〉に位置付けて用いているからである。養蚕世界においても、日常世界においても、同じ期間の〈時期〉を表すことから、お互いの生活世界がきわめて近接した関係にあるといえる。この点において、これまでに図6～19でみてきた比喻のメカニズムと異なるの

である。しかし、養蚕世界に専用の語で日常世界をとらえているという点では、それらと同様であり、バンシュウの用法も、養蚕語彙による比喩表現にとらえておきたい。

ところで、このバンシュウのような比喩は、人びとが、日常世界のさまざまな活動を、養蚕世界を基準にして把握していることを示すと考える。人びとの記憶は、養蚕世界が基準となっているということである。このとき、養蚕語彙は、日常世界を整理して合理的に記憶するという役割を担っている。養蚕語彙が日常世界に流れる時間を分節する語として機能し、日常世界で次々に生起するさまざまな事態の〈時期〉を、鮮明に記憶するために一役かっているといえよう。

なお、バンシュウは、〈蚕〉を表す造語成分を持たない語であるため、このような比喩に用いられやすかったと考えられる。話者の内省によれば、-ゴを持ったハルゴ、ナツゴ、アキゴは、日常世界の〈時期〉を表す比喩には用いにくいとのことである。

5. 養蚕語彙にみられる比喩の類型

さて、先に記述した一語一語の比喩のメカニズムをもとに、比喩の成立の仕方に視点を当て、養蚕語彙による比喩の類型をまとめておきたい。

半澤(1997, 1999)では、方言における比喩について、その認定の仕方を具体的に論じて分類を行いながら、そのとき実は単純に処理できない例も多いとしている。本稿で考察した養蚕語彙の比喩も分類の観点がいくつか考えられ、表現方法としての定着度や見立ての行われ方などに注目するとそこには連続性があり、単純化して分類することはなかなか難しい。ここでは、このような現状を認めたくえて、比喩の成立の仕方に注目して分類および考察を行う。

14語の養蚕語彙は、いずれも養蚕世界を言い表す語によって日常世界の〈もの〉や〈こと〉をとらえて表現するという共通性を持っており、その点において比喩であると認定した。図6～20によって、養蚕世界と日常世界を対応させながら図式化してきた通りである。一方で、それらの図によって比喩のメカニズムを考察してきたように、一語一語の比喩の成立の仕方に注目すると違いが認められる。その違いによって次のような類型に分類することができる⁵。

- A 比喩性の強い型：養蚕語彙で表される養蚕世界と日常世界が、かけ離れた生活世界であるために、比喩表現が成立したときに意外性が際立つ型（図6～19）
- B 比喩性の弱い型：養蚕語彙で表される養蚕世界と日常世界が、きわめて近接している生活世界であるために、意外性がほとんど感じられない型（図20）

まず、A 比喩性の強い型は、養蚕世界と日常世界の全く異なる対象に、それぞれの共通点を見だして重ね合わせを行っているというものである。養蚕語彙の中から一語が選択されて用いられたとき、それによって表されるそれぞれの対象がかけ離れている生活世界に位置するものであるため、意外性が生み出されて比喩性が強まったと考えられる。この類型に属する比喩は、養蚕世界と日常世界の重ね合わせが行われるときの語彙体系のあり方に注目すると、さらに次の二つのタイプに分類できると考える。

- A 比喩性の強い型－Ⅰタイプ：養蚕語彙の体系から一語で抜け出し、その体系から解放されて用いられるタイプ
- －Ⅱタイプ：養蚕語彙の体系から部分体系で抜け出し、その体系を保持したまま用いられるタイプ

Ⅰタイプは、図7～19の図式で表したものである。Ⅰタイプでは、養蚕語彙のそれぞれの語の意味を形成している意味特徴のいずれかを、日常世界の〈もの〉や〈こと〉にそのまま重ね合わせている。すなわち、類似点としての意味特徴同士を重ね合わせている。それぞれの語は、養蚕語彙の中から、それぞれ個別の必然性をもって選出されて用いられている。比喩のメカニズムとしては、原則的に養蚕語彙の本来の意味を構成している意味特徴の中のある部分だけが焦点化され、そこがまったく別の日常世界に投影されるかたちで成り立つ。例えば、図10の「年をとった人」を表すズーは、本来は「繭を作る直前の蚕」を表しているが、比喩では最終段階という意味特徴だけが焦点化され、それとしての意味が生起されている。本来のズーが持っている、色が変わる、忙しい作業に追われるというような意味特徴をはじめ、他のさまざまな意味特徴はまったく関与しておらず、最終段階に限定されている。養蚕語彙としての本来の意味は、養蚕世界の中で作り上げられ、生活の中で培われたさまざまな意味特徴によって形成されており、それらは本来の養蚕世界では自明のこととされているといつてよい。比喩が成立したときには、それらのうちのいずれかが焦点化され、表に立ちあらわれてくるのである。それによって、言語表現に意外性やおかしみが生まれ、豊かな表現効果を生み出していると考えられる⁶。このように、Ⅰタイプの比喩表現は、語ごとに認められるある意味特徴が重ね合わせられて、お互いに関わり離れた生活世界の対象を表して成り立っているものである。

Ⅱタイプは、図6で表したものである。養蚕語彙の部分体系が保たれたまま、かつ、日常世界での語彙体系にも影響を受けながら重ね合わせが行われている。Ⅰタイプが単独の語としての重ね合わせであったのに対し、Ⅱタイプは部分体系を保ちながら重ね合わせられる。単なる語の意味特徴の重ね合わせではない。飼育期による〈蚕〉を表す語彙の体系が、そのまま誕生季節別の〈人〉に重なり、それが新たな造語までも喚起して、体系としての均整が整えられている。養蚕語彙を、養蚕世界からはかけ離れている日常世界の対象に用いているという点では、Ⅰタイプと同じ性質を持っているといえる。

ところで、A比喩性の強い型をⅠタイプとⅡタイプに下位分類を行ったが、視点をかえてみれば、この型の中での比喩性の強弱によって下位分類することもできる。比喩性の強弱でAとBという二つの型に分類を行ってみても、そこにはすでに連続性があり、さらに下位分類をしようとするれば、またそこには連続性を見いだすことができる。比喩性の強弱における連続性を認めるにしても、それがどのような連続性なのかを詳細に説明する必要があるが、本稿では比喩がそのような実態であることを指摘しておくにとどめる。

つぎに、B比喩性の弱い型であるが、これは図20で示した比喩である。この類型の特徴は、養蚕世界と日常世界の対応においてきわめて近接した関係にあり、蚕の〈飼育期〉と日常世界のあ

る事態が生ずる〈時期〉とが同一の期間を表しているという点である。養蚕世界でも日常世界でも〈時期〉を表すことになるので、意外性がほとんど感じられない。ここでは、A比喩性の強い型に見られるようないわゆる見立てや喩えが行われておらず、比喩性がきわめて希薄となっているのである⁷。しかし、先にも述べたように、養蚕語彙で日常世界を捉え、解釈するという点では、A比喩性の強い型と共通しているのである。したがって、広い意味では養蚕世界と日常世界の重ね合わせが行われる比喩ととらえることができるが、比喩が行われる動機と意味に注目すると比喩性がきわめて希薄でありA比喩性の強い型と区別する必要があると考える。

6. 比喩の要因

これまで、比喩のメカニズムや比喩の類型について考察してきたように、養蚕世界の語彙で、他の生活世界を捉える方法は、豊かな表現効果を生み出すばかりではなく、人びとにとっては経済的な伝達方法であるといえる。その方法を支えているのは、養蚕が生活の中心にあったということと、人びとがその世界を熟知しているということであり、さらに人びとが養蚕世界と日常世界の両方に同時に生活しているということである。比喩の発話者にとっても、聴者にとっても、お互いに養蚕世界が熟知している世界であることから、伝えやすく理解しやすいといえる。そのみならず、伝わった、理解したというお互いの了解が得られやすいことも事実であろう。生業語彙に支えられた方言の比喩は、その現実を背景にして根付いていると考える。ここでは、日常世界のそれぞれの対象に、なぜ養蚕語彙を選択し得たのかという必然性について考えてみたい。

6.1. 〈人〉〈人の生き方〉〈子どもの育て方〉への比喩について

〈蚕〉を表す語彙が〈人〉を表すことは特に多く、他に〈人〉に関連して〈人の生き方〉〈子どもの育て方〉に用いられる。室山(1987, 1998, 2001, 2004)では、性向語彙における造語発想の特徴的なものの一つに比喩発想をあげ、喩えるものの特異性などを指摘している。その中に、動物を表す語彙からの比喩を分類しており、それらが生成される要因を地域社会との関わりにおいて論じている。〈蚕〉を表す語彙から、〈人〉〈人の生き方〉〈子どもの育て方〉への比喩も、養蚕語彙が性向語彙として機能している点で特徴的であり、これらが盛んに行われる要因も生活との関わりにおいてつぎのようにいくつか考えられる。

まず、〈蚕〉と〈人〉の共通点として、時間に伴って成長する、変化するという生きものとしての性質があり、それが比喩を生成する原動力になっていると考えられる。だからこそ、〈子ども〉〈年寄り〉や、〈人の生き方〉に用いることができるのである。

さらに、〈人〉の中でも〈子ども〉に対する比喩が目立つが、これには、〈蚕〉と〈子ども〉を表す語がコという同音語であるという点、および、それらが対象としてもっている飼育する行為と養育する行為の受け手であるという類似性が関与している。〈蚕〉も〈子ども〉もよりよく育て上げたいという意識のはたらく対象であり、その共通の思いが比喩の動機となっている。〈子ども〉を表すばかりではなく、〈子どもの育て方〉にまで用いられるのも肯首される。そして、比喩において、フユゴという新たな造語を行うことも容易であったと考えられる。

また、人びとの認識の中にある〈蚕〉に対する価値観もあげられよう。それは、〈蚕〉の総称や、日常的に交わされている表現に表れる。藤岡市方言において、〈蚕〉の総称として用いられる語は次の通りである。

〈蚕〉の総称　：　オ-コ-サマ（御蚕様）
 オ-カイコ-サマ（御蚕様）
 オ-カイコ（御蚕）

〈蚕〉は、オ-（御）や-サマ（様）という、〈人〉に用いられる敬称の接辞を付して呼ばれることが一般的である。人びとにとって、〈蚕〉が〈人〉と同じように扱われているのである。次の文例でも、〈人〉への比喩が多いことの理由が理解できる。

⑰「オカイコワ　オコサマ，テメーノ　コワ　ガキダ」ナンテ　ヨク　ユッタモンダ。

（「御蚕は御蚕様、自分の子どもは餓鬼だ」なんてよく言ったものだ）

⑱オカイコワ　カワイカッタヨ。マタ　ヤッテミテ　キガ　スル。

（御蚕は可愛かったよ。また飼ってみたい気がする）

人びとは、常に〈蚕〉と〈人〉との比較を行い、両者を共に大切な存在ととらえていたことを表していよう。

一方、〈桑〉を表す語も、タテドーシ1語であるが、これも〈人〉に用いられるには理由があるろう。タテドーシは、〈桑〉の成長過程の一部を表す語であることから、同じように成長過程をもっている〈人〉に用いられやすいといえる。

6.2. 〈農作物〉〈仕事〉〈時期〉〈樹木〉への比喩について

〈蚕〉を表す語彙から〈農作物〉〈仕事〉〈時期〉へ、〈桑〉を表す語彙から〈樹木〉へという、おのおのの比喩についてもそれぞれに要因が考えられる。

まず、〈蚕〉から〈農作物〉を表す比喩について述べる。〈農作物〉としての〈苺〉〈トマト〉は、〈蚕〉と同じように養い育てるものであり、生活を支えるための成果をあげねばならぬものである。また、時間の進行に伴って、成長をして変化をしていくという点でも共通している。その変化の中で、それぞれの状態が移り変わっていくという共通性が、比喩の動機となっていると考えられる。

つぎに、〈蚕〉から〈仕事〉への比喩であるが、養蚕ではない別の〈仕事〉であっても、当然、忙しさという状況を伴うことがある。養蚕が生業の中心にあった方言社会では、別の〈仕事〉であっても、作業という共通点によりその状況を養蚕語彙で捉えて表現する。その作業が、生活を支えるための生業に対してであれば、なおさらに養蚕語彙で表現しやすいと考えられる。

さらに、〈蚕〉から〈時期〉への比喩についてである。日常世界の〈時期〉を、養蚕世界の

〈飼育期〉を表す語で言い当てている。この理由には、人びとが、養蚕を営むとき、養蚕世界と日常世界の両方に、同時に生活しているということがある。人びとは、養蚕世界に生きながら、同時に日常世界にも生活している。自らの生きてきた一つの時間軸の中に、養蚕世界と日常世界が共存することになる。したがって、両方の生活世界の時間が重なり、同じ語で表現されることになったと考える。

最後に、〈桑〉を表す語から〈樹木〉への比喩についてである。これは〈桑〉を表す語で、〈桑〉以外の〈樹木〉の様子を表すものであるが、〈桑〉も〈樹木〉の一種であり、お互いの共通点を認めやすいことは想像に難くない。他の〈樹木〉をとらえて表現するときに、〈桑〉を表す語が指標となるのは、これもまた養蚕の盛んであった地域の特性であると考えられる。

7. まとめと今後の課題

養蚕語彙の比喩は、養蚕が盛んであった地域社会の方言における表現の特徴として興味深い。それに加えて、養蚕語彙の体系の中から、複数の語が、しかも、限られた意味分野の語が、語彙としてのまとまりをもって比喩に用いられているということにも注目すべきであろう。このような比喩のあり方は、養蚕の盛んであった地域の方言ならではの表現であると推察される。


本稿では、本来の役割を失っている養蚕語彙が、日々の生活の中で豊かな表現力を発揮している様子を記述してきた。その結果、すでに養蚕から離れてしまうことによって、同時に消滅してしまったかにみえる養蚕語彙も、そのうちの一部は、未だ現在の日々の生活の中で、活力に溢れた比喩によって生きていることがわかった。このような比喩は、養蚕世界を共有している人びとにとっては、きわめて効果的で経済的な表現方法であり、かつ、伝達方法である。

ところで、これまでの私自身の養蚕語彙の研究においては、語彙量の豊富さや、それに伴う語彙体系の緻密さに、養蚕業が盛んであったことの現実が反映されているとしてきた⁸。本稿では、養蚕語彙が別の生活世界で用いられた場合、それらのすべてを比喩であると認定し、考察を行ってきた。この立場をとったのは、養蚕業の衰退に伴って消滅の危機にさらされている養蚕語彙が、現在の日常生活の中でいまだ生活語として生き活きと活躍しているという言語事象としての実態を記述し、かつて盛んに行っていた生業の語彙が、その地域における方言の体系の一部を形成しているということを示したかったためである。このようにとらえることによって、語彙量や語彙体系には表れてこない、人びとの養蚕世界の認識の仕方を明らかにすることができた。養蚕語彙の比喩に確認される人びとの認識は、養蚕世界の中で培われてきた語のさまざまな意味特徴に支えられているものであった。人びとは、養蚕世界での認識と名付けに基づいて、日常世界を解釈し、かつ、表現している。この背後には、かつて人びとが養蚕業を盛んに行ってきたという現実があり、それが方言形成の一側面に関与しているものと考えられる。

今後は、群馬県内の他の地域でも採録している養蚕語彙における多様な比喩表現の考察を行い、養蚕業を営んできた人びとが、その産業を失っても、日々の生活を養蚕語彙によって把握しているということの普遍化を行っていきたい。その際には、比喩の定着度という観点からの考察も必要である。慣用的な比喩と臨時的な比喩の認定の方法を検討しながら、比喩の成立に関する

両者の違いを具体的に明らかにしていきたい。さらに、〈蚕〉という昆虫を表す語を用いた比喻であるだけに、〈人〉を表す比喻については、待遇に関わる運用面の考察も必要であると考えている。

注

- 1 本稿における主な括弧は次のように用いている。
〈 〉：語が付与される対象を表す。「 」：語の意味を表す。()：言語形式の解釈を表す。
[]：解釈をするための補いを表す。
- 2 新井(1995)では、養蚕語彙における名詞語彙の体系を記述するために、その内部に12の意味分野《蚕》《桑》《繭》《飼育》《蚕の活動》《虫害》《廃物》《人》《場所》《信仰》《作業》《道具》を設定した。本稿では、この意味分野のうち、《蚕の活動》《虫害》《廃物》《人》《場所》《信仰》《作業》《道具》から比喻表現に用いられる語はないことを確認した。比喻に用いられるのは、《蚕》《繭》《飼育》と《桑》からの語彙であるが、本稿では、前者を「〈蚕〉を対象として用いる語彙」、後者を「〈桑〉を対象として用いる語彙」とし、新たな視点によって分類をし直して考察する。
- 3 図6～図20の  内には、語の意味(「 」を付して示したもの)を構成している意味特徴を記す。本文中では、この意味特徴に_____を付して記す。このとき意味特徴としているものは、人びとが〈もの〉や〈こと〉の性質として認識している、百科事典的意味のことである。
- 4 新井(2005b)では、話者の説明に基づいてズーの意味記述を行い、ズーによる比喻表現の多様性について論じた。
- 5 比喻の種類については、新井(2005a)でも考察を行い、それぞれの類型に名称を付けた。本稿では、比喻の意外性が強いかわ弱いかわという点に注目してその名称をあらためた。すなわち、新井(2005a)での「重ね合わせ型」をA比喻性の強い型とし、同様に「位置付け型」をB比喻性の弱い型とした。
- 6 このような比喻による現象は、養蚕語彙に限らず、さまざまな意味分野の語彙にもみられることが確認されている。篠木(1996)は、モチ(餅)、マンジュー(饅頭)、ダンゴ(団子)を中心とする食語彙の研究において、比喻表現の成立の仕方について言及している。食語彙のモチ(餅)を使ったモチハダ(餅肌)を例に挙げ、「比喻の世界は特別の世界ではなく、私たちの生活世界の実感そのもの」とし、比喻表現にこそモチの「白い」「きめ細かい」「美味しい」「粘りけがある」「ふわふわ柔らかい」「上等」といった実感が表出されるとする。
- 7 比喻性が希薄なバンシュー(晩秋)のような用法、すなわち「B比喻性の弱い型」の用法は、藤岡市方言に限らず広く群馬県内に目を向けてみると、他の語にも認められる。このような方言事象としての実態は、人びとが養蚕業を基準にして日常生活を把握しているということにはほかならない。本稿では、養蚕語彙が養蚕世界以外の生活世界で用いられたときの機能について、比喻の観点から考察を行ったが、「B比喻性の弱い型」に分類した用法を比喻としてとらえることが有効か否かということも含めて、あらためて論ずる必要があろう。この点については、方言の形成に関わる研究課題として位置付け、稿をあらためて論じたい。
- 8 新井(1995, 1999)では、養蚕語彙における名詞語彙の記述を行い、造語法や語彙体系についての考察を行っている。

参考文献

- 新井小枝子(1995)「群馬県吾妻郡六合村方言における養蚕語彙—養蚕語彙体系の記述方法と考察—」『国文学研究』15, 83-96, 群馬県立女子大学国文学会
- 新井小枝子(1999)「群馬の養蚕語彙」高崎経済大学附属産業研究所編『近代群馬の蚕糸業—産業と生活からの照射—』237-274, 日本経済評論社
- 新井小枝子(2005a)「群馬県藤岡市方言における「養蚕語彙」の比喩表現」『日本方言研究会第80回研究発表会発表原稿集』1-8, 日本方言研究会
- 新井小枝子(2005b)「養蚕語彙による比喩表現—群馬県藤岡市方言におけるズーを中心に—」『国文学言語と文芸』122, 85-102, 国文学言語と文芸の会
- 篠木れい子(1996)「食語彙を読む」『月刊言語』25(11), 64-71, 大修館書店
- 半澤幹一(1997)「方言比喩語研究のために」加藤正信編『日本語の歴史地理構造』577(28)-563(42), 明治書院
- 半澤幹一(1999)「方言比喩語の動機付けの傾向—馬鈴薯・どくだみ・すみれ・春蘭を例として—」佐藤武義編『語彙・語法の新研究』352(83)-338(97), 明治書院
- 室山敏昭(1987)『生活語彙の基礎的研究』和泉書院
- 室山敏昭(1998)『生活語彙の構造と地域文化—文化言語学研究序説—』和泉書院
- 室山敏昭(2001)『「ヨコ」社会の構造と意味—方言性向語彙に見る—』和泉書院
- 室山敏昭(2004)『文化言語学序説—世界観と環境—』和泉書院

付 記

本研究は、「平成16年度公益信託田島毓堂語彙研究基金」研究活動助成による研究成果の一部である。また、本稿は、日本方言研究会第80回研究発表会（2005.5.27 於：甲南大学）において、「群馬県藤岡市方言における養蚕語彙の比喩表現」と題して行った口頭発表が土台となっている。発表に際し、さらには、発表の席上で、多くの先生からご意見を賜り、ご指導をいただきました。投稿にあたっては、査読委員のみなさまから有益なご助言をいただきました。感謝申し上げます。最後に、話者のみなさんにお礼申し上げます。

(投稿受理日：2006年10月6日)

(最終原稿受理日：2007年2月14日)

新井 小枝子（あらい さえこ）

群馬県立女子大学非常勤講師

370-1193 群馬県佐波郡玉村町大字上之手1395-1

ransetsu@green.ocn.ne.jp

The figurative uses of sericultural terminology in the dialect of Fujioka City, Gunma Prefecture, Japan

ARAI Saeko

Gunma Prefectural Woman's University

Keywords

sericultural terminology, figurative use, metaphor, dialect of Fujioka City Gunma

Abstract

Sericultural terminology originally used for the production of silk is systematically used to conceptualize aspects of everyday life in the dialect of Fujioka City, Gunma Prefecture, where the sericultural industry was once prevalent but is now almost extinct. People who used to raise silkworms now figuratively use what were once words for their occupation in their daily conversation.

Thirteen terms and one new coinage have been collected from eight speakers who were born between 1916 and 1960 in Fujioka City and who have been engaged in silkworm-raising between 1955 and 1984. The data were obtained from natural conversations and were supplemented with interviews.

The aim of this paper is twofold: to describe the figurative uses of sericultural terms in everyday life, and to clarify how these uses are conceptually structured. For each of the terms collected, the basic and the figurative meanings are described in detail. Classification of them makes it clear that the terms for silkworms, cocoons, mulberry trees and leaves are used metaphorically and metonymically to characterize people, things and events in the domain of everyday life. Figurative expressions have been classified according to their conceptual structures. One type of expressions is formed by superimposing images from the sericultural domain on to the entities in everyday life. Another type is formed by placing the concepts of everyday life into the framework of the sericultural calendar. Thus, it is demonstrated that speakers continue to use sericultural terms long after they have ceased to raise silkworms.